

「また川が教えてくれること」

R09020 荻野克眞

指導教員 澤田英行

1. はじめに

かつての日本には小さいながらも個性を持った、地域固有の歴史と風土に根差した都市や農村があった。1960年代後半、高度経済成長期と共に始まるモータリゼーションの到来は幹線道路の整備に拍車をかけ、駐車場を集客装置とするロードサイドショップが乱立し始めた。街並みも生活もその土地の自然や風土とは無関係になり、土地が消費の対象となった全国均一都市・ロードサイドショップは、様々な弊害を招き、街から本来あるべき固有性を剥奪した。ロードサイドショップが乱立した幹線道路沿いの土地にあるべき建築とは何だろうか。



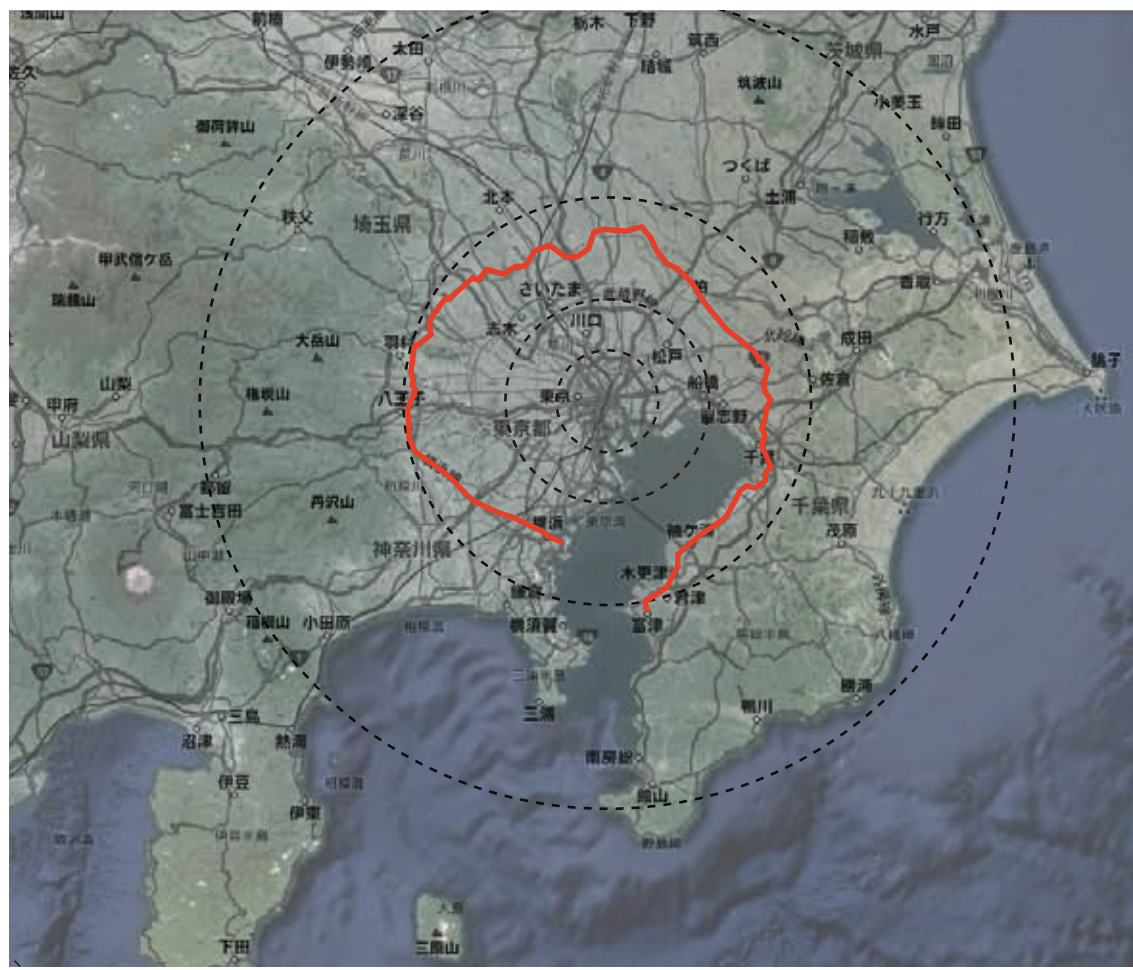
道路沿いに完備された駐車場

2.目的

豊富な自然環境を生かし、農業や産業などの生産を行っている地域住民。消費を行い流動的に行き交うアノニマスな消費者。ロードサイドで今まで交わることのなかった両者を交錯させ、その土地の自然や風土に気付き、享受することのできる建築を提案する。



—3.1 国道 16 号線～日本経済を示す標本空間



：国道16号線

集中して居住するようになった。また、一部で人口減少を意味し、将来は消費の衰退を嫌って投資が減退、地域経済は沈滞するという予測が立てられる。標本空間と呼ばれ、消費社会化した幹線道路の現況を明確に指し示す、国道16号線沿いの都市を選定する。

—3.2 埼玉県川越市

国道16号線を通る都市の中から対象敷地を選定するに際して、以下の条件をあげる。1.居住人口が多く、高齢者率が高い。2. 古くから町の歴史と文化がある。3.幹線道路沿いの消費社会化が激しい。4. 森林、河川、沼、地形の起伏などの自然環境が豊富にある。以上の条件から「埼玉県川越市」を対象敷地の都市として選定する。

□川越の基本情報

高齢者数：76,949人 高齢化率：22.22% 2000年人口：323,642人

団塊ジュニア人口：29593人 団塊ジュニア比率：9,14%

沿線道路における商業施設のチェーン店の比率：59.1%

□川越



歴史的建造物



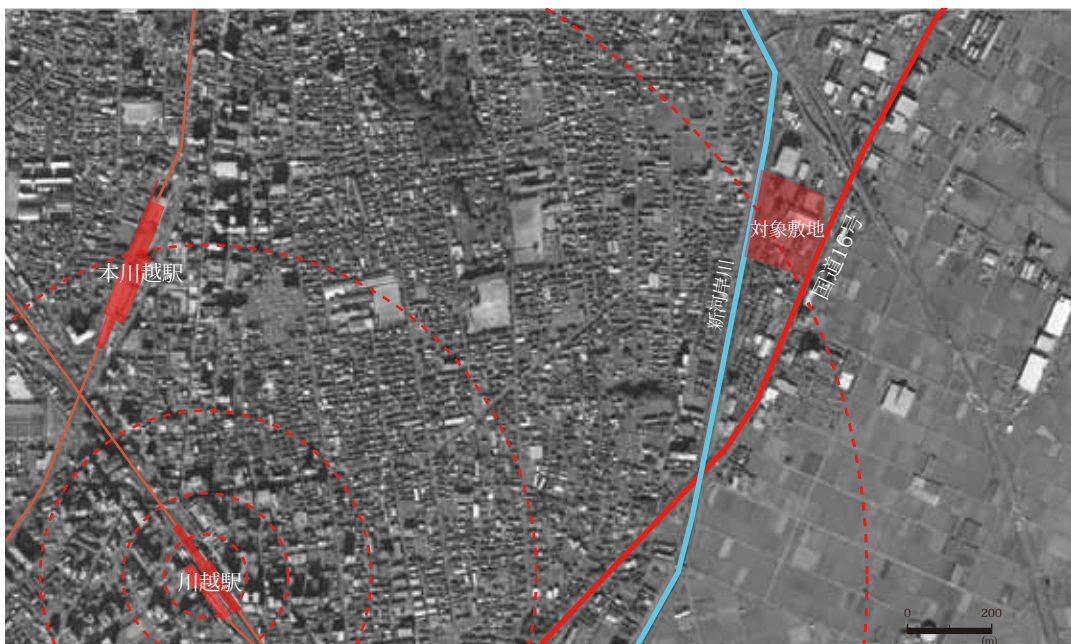
伊佐沼



農業

—3.3 対象敷地

□埼玉県川越市仙波町 第一種住居地域 建蔽率：60% 容積率：200%



江戸への舟運が通り、大江戸と小江戸を結ぶ経済動脈として機能していた新河岸川と現在、交通・輸送・消費などの側面から生活インフラとして機能している 16 号線に挟まれたこの土地を対象敷地とする。対象敷地内には新河岸川に向かって、伊佐

沼を水源とした 2 本の用水路が通っている。新河岸川は町と町、用水路は建物と建物のお互いを隔てる境界として存在する。

—3.4対象敷地の写真



—3.5 新河岸川の川辺空間と記憶

この舟運は寛永 15 年 (1638 年) 川越の仙波東照宮再建のため、江戸から当地に建築資材を運搬したことに始まりである。新河岸川舟運が一段と発展したのは、川越城が松平信綱の正保 4 年 (1647 年)、同藩の年貢米を江戸に運送したことが契機となった。やがて新田開発も進み、農産物の生産が向上すると、川越及びその近辺からも麦・甘露、醤油、炭、屋根板などの特産物が運ばれるようになる。昭和 5 年 (1930 年) に 300 年続いた新河岸川舟運に終止符を打った。



4.提案

アノニマスで流動的に行き交う消費者を国道 16 号線から新河岸川へと引き込み、過去に生産・生活の拠点であった新河岸川に食の空間を設ける。さらに、川へと引き込むきっかけとして用水路を利用する。水路に接した残余空間には生産の場所を与え、ロードサイドの残余空間から生産の過程が垣間見える。ロードサイドを利用する人々は、用水路の生産の場所から川へと引き込まれ、この土地で生まれた生産物を食すことで、この場所で失われた場所性を享受する。

—4.1 川辺と用水路を中心とした残余空間の利用



駐車場

耕作地・畑

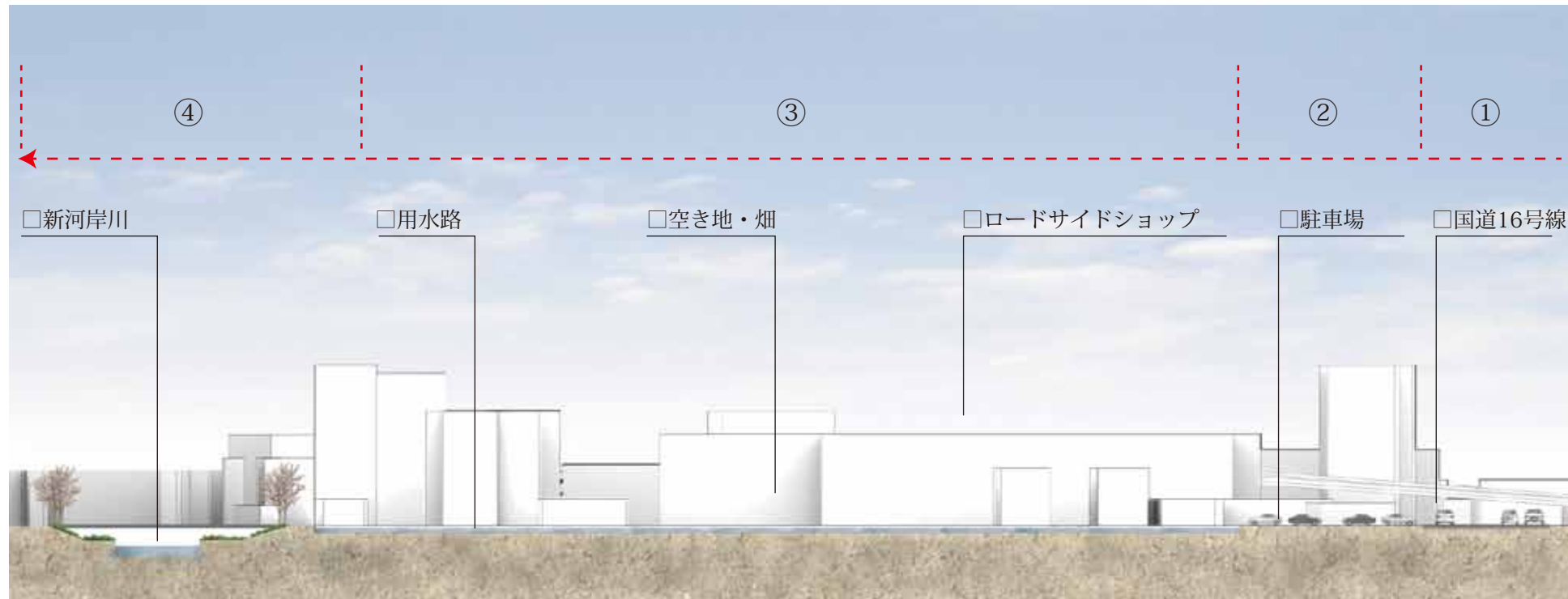
隙間

川辺

空き地

既存のロードサイドショップのポテンシャル（集客力）を生かすため、16 号線沿線の開発やロードサイドショップの建設などによって、2 次的に発生したこれらの残余空間を対象敷地とする。開発や建設で置き去りにされた都市の余白を敷地とし、地域内の境界として存在する新河岸川と用水路に建築という付加価値を与え、取り残された残余空間を地域の活動の拠点として再生する。

—4.2国道16号線・用水路・新河岸川の関係



①国道 1 6 号線
現在消費が行われている国道 16 号線に生産を行う場所を設ける。消費空間とこの土地で何が作られているのかを見せる場所となる。

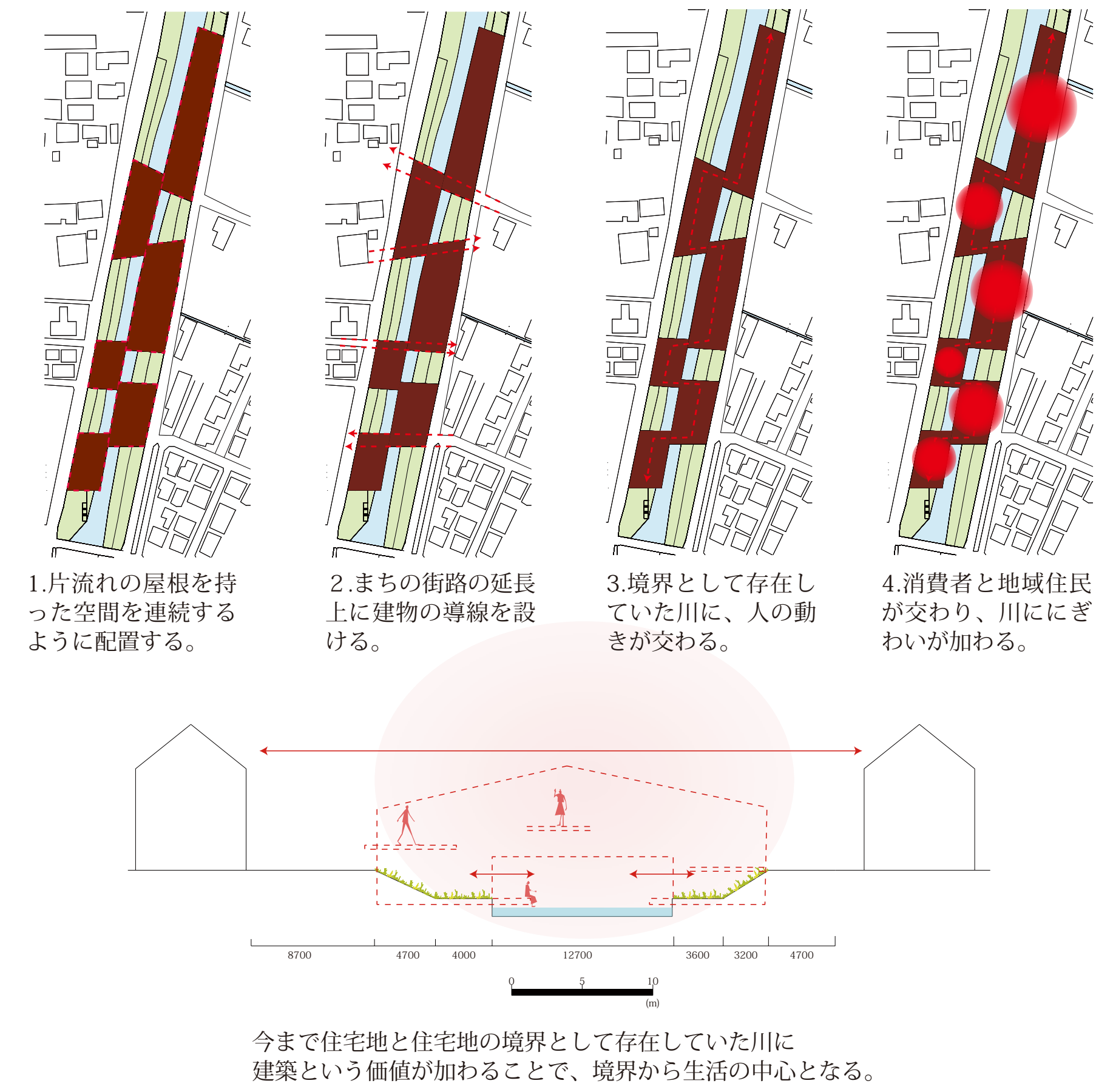
②駐車場：加工場・作業場
車を止めた消費者はこの土地で生産される加工品や、作物が生産される光景を目の当たりにする。

③用水路と残余空間：加工場・作業場
加工品や作物を生産するために、用水路の水を使用する。用水路を中心として人々の生活や活動は、使われていない残余空間建築が広がり用水路の終点である新河岸川へと、人を引き込むきっかけとなる。

④新河岸川：食事処・公共空間
うつろいある空間の中に食を中心とした消費空間を設ける。この土地で生産された作物・加工品を食することで消費者と地域住民は、この土地の固有性を享受することができる。

6.設計手法と構成

□ダイアグラム

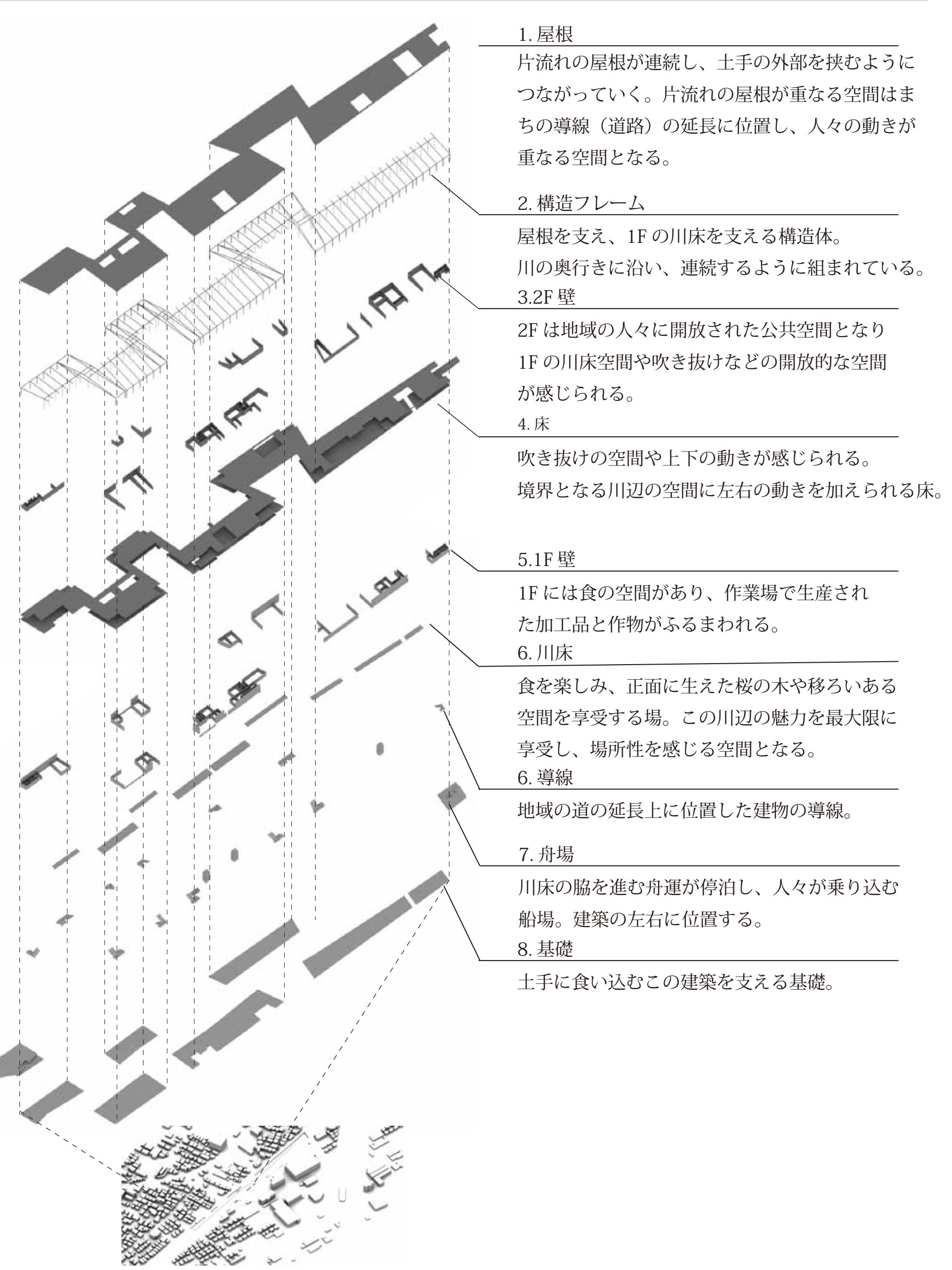


—6.1川床の空間

川床、納涼床(のうりょうゆか、のうりょうどこ)、あるいは(鴨川では「ゆか」、貴船、高雄では「かわどこ」と読むのが一般的)は京都の夏の風物詩の一つである。料理店や茶屋が川の上や、屋外で川がよく見える位置に座敷を作り、料理を提供する。本提案では川床空間を持った建築を新河岸川に付加させ、新河岸川を場所性や土地の固有性を享受できる場として再生する。



—6.2 構成



6.3 パース



□ 川床から移ろいある景色を堪能しながら、川床で食を楽しむ。



7.畑・駐車場・空き地の空間

川の建築操作と同様に、片流れの屋根を持った空間を連続するように配置し、まちの街路の延長上に建物の導線を設ける。用水路の線に対して人の動きと活動が交わり、これまで住宅と住宅との境界として存在していた用水路は川へ人を引き込む媒体となり、きっかけとなる。用水路に接した残余空間には加工場・作業場が設けられる。

—7.1用水路を中心とした空間設計



川まで続く用水路の一本道。道の途中にはこの土地の食物を収穫する作業場や加工場があり、生産物がこの用水路から引かれる水によってできていることを実感する。



—8. 配置図



■参考文献

「郊外の社会学」- 現代を生きる形 - 著：若林幹夫
「ファスト風土化する日本 - 郊外化とその病理」 著：三浦展
「東京圏が変わる 消費が変わる - 国道 16 号が語る日本の近未来」 著：西村晃
「東京から考える」 著：東浩紀 北田晁大